

第十二回 成田空港問題円卓会議

一九九四（平成六）年十月十一日（火）

成田市「成田国際文化会館」

隅谷三喜男（隅谷調査団团长）

それでは、時間がまいりましたので、ただいまから第十二回の成田空港問題円卓会議を始めたいと思います。

本日は、これから申し上げますが、私たちとしてはこれをもって円卓会議の最終回としたいというように考えて、そのようなスケジュールを作ったりいたしました関係で、今日ご参会の方も非常に多い。そうしますと、円卓会議の本来の趣旨からしますと、同じ平面で円卓を囲む我々と、それを取材される新聞社あるいはテレビ等の報道機関の方々、それから一般の参加者の方々、すべて同じレベルで会議を開いてきましたが、本日は非常にたくさんおられるので、そういう場所がないということ、こういう多少段差のあるような会場を選びました、ということをお知らせいたします。

本日のスケジュールといたしましては、まず最初に昨年の九月に始まりまして十一回、今日で十二回目、約一年に及ぶ円卓会議における提案、議論を踏まえまして私たち調査団の最終所見を申し上げます。

その後、それをめぐりまして、運輸省のほうから、次官が運輸省のほうの見解は言われることになっております。それから空港公団の総裁、それから千葉県知事、今紹介をしました逆の順序でまいりまして、今度はお向かって右のほうに移りまして、三郡代表となっておりませんが、この周辺の市長、町長さんたち、そして三人の地域代表の方々、そして最後に同盟の方から所見をいただくと、という順序で進行したいというように思っております。

そして、皆様のご意見を伺った後で、最後に調査団としての総括を私の口から申し上げたい。そしてこの円卓会議を終わることができれば大変幸いと、このように思っているわけでありませう。

隅谷調査団の所見発表

隅谷三喜男（隅谷調査団团长）

最初に一言だけ申し上げておきたいのでありますが、九月十三日に開催されました第十一回円卓会議において、各組織の意見が大きく接近したということを確認いたしました。その詰りを拡大運営委員会に一任していただくということを前回は承していただきました。

それで、九月二十九日にその拡大運営委員会を開きまして、これから私たちの所見として申し上げます。「円卓会議の終結に当たって」ということで詳細に申し上げます。「共生懇談会」、それから「地球の課題の実験村」、さらに平行滑走路・横風用滑走路などについて忌憚のない意見の交換を行いました。拡大運営委員会です。ね。そして、基本的な見解の一致に到達したわけでありませんが、なお残された具体的な問題点については、この拡大委員会において我々調査団が、各関係の方々とよく話し合って調整に当たるということで、一任をいただいたわけでありませう。

そこで、そういう手続きを踏みました。その後、ここにおられる新聞など種々の報道がされたわけですが、そこにはかなり混乱した報道が流れたりいたしました。少々困ったこともありますが、調整は関係者の尽力によって順調に進み、本日に至って、こういう円卓会議において私たちの所見、最終所見というものを発表することになったわけでありませう。

そこで、これから「円卓会議の終結に当たって」という我々調査団の最終所見を申し上げたいと思っております。これはお隣の高橋先生に発表をお願いしたいと思います。皆さんのお手元にも配られていると思っております。よろしくお願ひします。

高橋寿夫（隅谷調査団）

それでは、朗読いたします。

成田空港問題円卓会議の終結に当たって

一九九四（平六）年十月十一日

隅谷調査団

一．円卓会議の目的

第一回の円卓会議が開かれたのは昨年九月二十日であった。その年の五月に終結した成田空港問題シンポジウムの結論に基づいて、問題解決のため「地域の理性あるコンセンサスをつくりあげる新しい場」を設けることとした。それはそのことに関係のある各方面を代表する人々が構成員となり、お互いに対等の立場で円卓を囲むことから、円卓会議と呼ぶこととなった。私たち「隅谷調査団」は、シンポジウムの議論の総仕上げという立場から、引続きその運営の責任を引受けることとなった。

シンポジウムの役割は、成田空港問題の歴史的経緯にさかのぼってその事実関係を明らかにし、特に計画を推進する国の側に、民主主義の原則に照らして問題がなかったかどうかを検証することであった。これに対し、円卓会議の目的は、シンポジウムの結論に従って国が土地収用裁決申請を取下げ、未完成の滑走路計画を白紙に戻した経過を踏まえて、地域と空港との共生のあるべき姿とは何かを討議することであった。

二．会議の経緯

そのためにはまず、現存する成田空港の出現が地域社会にどのような影響を与えて来たかについて、事実に基づいて調査し取りまとめる作業を行うこととし、県が中心となって地区別の調査を行った結果が円卓会議に報告され、関係者からの質疑や討論を経

て、今後空港の建設や運営を行う場合に認識しておかなければならない事柄が明らかになった。

次の段階としては、成田空港のような大規模空港を建設する場合に、地域社会と空港とが、利害や立場の相違を超えて相互に協力するためには、国は、いかなる考え方のもとにいかなることをなすべきかという一般原則を定め、表明することを求められた。国は数名の有力な学識経験者の参加を得て議論を行い、これを取りまとめて円卓会議に報告した。

この報告は、国が成田空港の建設を進めるに当たっての過去の手法を反省し、空港建設に臨む国の基本姿勢を大きく転換する考え方から生まれた。即ち、空港の建設に当たっては、自然と歴史を内包した地域社会の原存在を前提とした上で、これと共生するために国はいかにあるべきかを示したものである。

そのためには、事前に十分な時間をかけて、幅広く地域の意見を吸収して、これをもとに計画の大綱をつくり、民主的な話し合いを通じて計画の実行手順を進めるべしとしているなど、今後の空港計画を進める上での基本的な指針となるものであり、円卓会議の成果として、成田空港関係者を含め、社会的に高く評価される内容を持つものであった。

このようにしてでき上がった「共生の一般原則」を、成田空港という具体的な対象に当てはめた場合にどのようなことになるのか、これが次の問題である。現空港は、先の調査にも明らかのように、空港をめぐる地域社会に様々な光と影をもたらした。この事実を踏まえて、住民の幸せな暮らしを確保し、空港と地域の発展を図るために、何がなされなければならないか、これがテーマである。円卓会議は、住民代表を含むすべての構成員から、数回にわたって率直な意見表明と将来のための提案を求め、幅広い意見の開陳を見ることができた。

この中で最大の問題は、いったん白紙に戻された平行および横風用の二本の滑走路計画の取扱いであ

った。国はこれを建設したいとし、反対同盟はここに地球的課題の実験村を建設すべしとし、両者の意見の対立はなかなか埋められなかった。また騒音軽減のための諸対策についても、両者の間に激しいやりとりがあった。

他方、地方公共団体や地域住民からは、騒音対策についてはその拡充を求めつつ、地域の将来のためには滑走路の建設は必要とする意見も提出され、この問題は円卓会議後半の最大のものであった。

そして円卓会議の終盤を迎えた第十一回の会議に、国から滑走路計画および騒音対策について立入った見解の表明があり、横風用滑走路については「平行滑走路の整備と切り離すことが適切」とかなり踏み込んだ提案がなされ、反対同盟は、提案全体に示された姿勢を高く評価した。

また、国はこの日の提案の中で、反対同盟の掲げる地球的課題の実験村構想を高く評価し、その実現に向かって協力する旨の発言を行うなど論議にかなりの進展が見られた。

三. 対立構造の解消

十一回に及ぶ円卓会議の進行を顧みて、そのあらかましの経緯を述べたが、全過程を通じて我々の最大の関心事は、円卓会議の議論を通じて、この地域におけるいわゆる対立構造の解消が図られることであった。

対立構造は、もともと空港建設を進める国の側とそれに反対する反対同盟との間に発生したものであり、空港建設をめぐる問題が最大のものであることは言うまでもないが、四半世紀を超える成田問題の経緯の中で、地域社会の内部にもそれは波及し、空港の建設による地域構造の分断や生態系の破壊などと相まって、地域社会の空気を暗いものにしていくことは否めない。この対立構造とそこに生じた不信感を一日も早く解消して、地域社会が再びもとの明るさを取り戻し、未来に向かって力を合せて進むこと

を願ひ、そのための方途を何とかして円卓会議において見出したいと終始考えて来たところである。

このような見地に立つて、我々は、円卓会議で討議された主要な問題について次のような見解を表明したい。円卓会議を構成するすべての構成員およびその関係のすべての地域社会の住民の方々によって、この見解が受け入れられ、合意された事柄がすべての関係者によって尊重され実現を見ることによって、対立構造と不信感が解消し、地域の将来の発展が図られて行くことを強く期待するものである。

四. 共生懇談会（仮称）について

空港はその性質上、広大な用地を必要とし、またその運用による騒音の発生などが不可避であり、特に内陸空港の場合、地域社会に対して大きな影を投げかけざるを得ない。空港の出現によりその地域社会に大きな光を生み出すことももちろんだが、光を享受する分野と影となるところが出現するので、空港を運営する側が、空港によりデメリットを受ける住民に対し、どのような理解を示し、血の通った対策を講ずるかが、空港がその地域社会の一員として存続し得る必須の条件になる。

これらの問題を好ましい方向に解決し、地域住民のわだかまりを解くためには、空港を運営する主体に自主的な対応を求めるだけでは不十分であり、その外部に第三者機関として例えば共生懇談会というような組織を設け、空港の建設が共生の基本原則に沿って公正に行われているかを見守るほか、空港の運用に伴い発生するいろいろのデメリットについて耳を傾けると共に、それを解決する方策について討議する場とすることが必要である。その構成員としては、空港をめぐる関係自治体、その住民代表、学識経験者を中心とし、運輸省、空港公団は説明者として参加し、その討議の結論については、国や公団など空港運営側は誠意をもって受け止め、その実現を図ることとされたい。

成田空港については、現在地域振興連絡協議会という組織があり、関係自治体の長がメンバーになっている。この地連協のカサの下に、独立の協議機関として共生懇を設置し、県が中心となって事務局を設けて着実な運営を期することが適当であると考える。

このような仕組は、先進諸国においては既に環境監査（エコオーディット）の仕組としていくつかの先例もあり、地球環境問題の解決のための基本的な取組みの姿勢にもつながるものと考える。共生懇は、このような趣旨の組織であるから、その会議の内容や取りあげようとする問題点などについては、地域住民に対して情報が公開され、住民のすべてがその成り行きに関心を持ち、参加意識を抱いて、広い意味での地域民主主義の醸成機関の役割を果たすようになることを期待したい。なお、この共生懇の構成や運営に関しては、すべて円卓会議運営委員会において引き続き討議・決定されるものとする。

五．地球的課題の実験村について

人間は太古以来自然に働きかけ、自然の恵みを受けて生きて来たが、次第に土地に定着して食物を栽培するようになった。農という営みはそのようにして生れたが、それは同時に土地をめぐる地域共同体の形成となり、人間の社会はそれを契機に発展した。農はまさに人間の営みの原点であった。

ところが産業革命以来の近代工業社会は、付加価値生産性の高さを優先させ、産業構造における農業の地位を低めながら、いわゆる産業の高度化を進め、特に第二次大戦後急激に科学技術優先の世界を作り出して来た。現代はその行きついた地点にあるが、このようなことの結果が何私たちの社会にもたらしたか。それは日々私たちが目のあたりにし、眼をおおいたくなるような状況が全地球的に拡がっていることを否応なしに知らされている。

私たちはここでもう一度自然との共存、食料供給

の原点という観点に立ち帰って農という営みの持つ重要性を認識し、そこを基点にした産業や社会の再構築を試みる必要に迫られているのではなからうか。近代技術の粋を集めた空港というものの出現により、汗の結晶たる大切な農地を手放さざるを得なかったこの地域の中から、反対同盟の発想によって「地球的課題の実験村」構想が提案されたことの意義を高く評価したい。

そのような立場の下で、国がすみやかに実験村構想の実現のための検討作業に入ることとされたい。当面運輸省の中に、農業に関する学識経験者などを中心にした検討委員会を設け、関係する各省の協力も得ながらこの構想の実現のための第一歩をすまやかに踏み出すこととされたい。この問題は農業の部門に止まらず広く地球環境保全という範囲にまで拡がって行くであろうが、そういう全地球的課題を解決するための新しい構想が、成田空港をめぐる反対運動の中から提唱されたことの意義は深く、反対同盟の従来の発言や行動の目指すところが究極においてこのような構想に到達したことを認識し、この事実を重く受け止めたいと思う。

六．滑走路計画について

成田空港は、首都圏唯一の国際空港であり、地域との合意を形成しつつ、その整備を進めて行くべきだという認識については、円卓会議への参加者の一致しているところである。

しかしながら、その計画予定地や騒音による移転対象区域には、なお多くの住民、地権者がおり、空港の具体的な整備の在り方については、必ずしも意見の一致を見ていない。したがって、円卓会議の結果をこのような人たちに對して一方的に押しつけることなく、あくまでも話し合いによって進めるとい

う基本は守らなければならない。さらに、滑走路計画について論ずる前提として、これまでの空港建設に伴って生じた根強い不信感の

解消や騒音などいまだに解決困難な問題、また滑走路が完成した場合、負荷を負うこととなる住民の諸問題が、併行的に解決されて行くことが必要であることは言うまでもない。

(一) 平行滑走路

我が国の社会経済の発達によって、その国際社会に占める地位が高まると共に、首都東京を控えた成田空港の役割は増しつつある。もちろん我々は、航空需要の単なる量的増大に対応して成田の能力増強を唱える立場に単純に組みするものではなく、航空機の離着陸によって発生する騒音によって、空港周辺の住民が受ける苦しみなどを考えるならば、需要の質の面に思いをいたさざるを得ない。しかしながら、「わが国の国際的地位にふさわしい外交、文化、経済など広い分野で質の高い国際活動を進めるために、首都を控えた空港の能力不足の解決策として平行滑走路の建設を必要とする」という運輸省の方針は、世論のすう勢や地域社会の多くの意見を踏まえれば理解できるところである。

なお、平行滑走路のための用地の取得のために、あらゆる意味で強制的手段が用いられてはならず、あくまでも話し合いにより解決されなければならない。また、このためには弾力的な対応も考える必要がある。この話し合い解決という基本姿勢は、シンポジウム開催の準備段階から、運輸省が再三にわたって公の場で表明して来たことであり、今後は、新しく設けられる共生懇の公正な光のもとに、計画予定地および騒音下住民との合意を形成しながら進めることが肝要である。

(二) 横風用滑走路

横風を受けた機体の安全を確保するために計画された滑走路であるが、近年における機材の推力の向上から、成田空港においてこれを使用するケースは著しく少なく、年間約二％程度と言われて



いる状況に照らすならば、現在直ちにこれを必要不可欠とするような緊急事とは言えないと考える。しかしながら、航空機を操縦するパイロットや離着陸機通過直下の住民の立場を考えると、横風や突風などの際の機体の安全のためには、横風用滑走路の必要性を将来にわたって否定し去るわけにはいかない。

そこで我々の見解としては、前述の平行滑走路が完成した時点で、横風用滑走路について環境への影響などを調査した上で改めて提案し、関係する地域社会と十分話し合いを重ね、その賛意を得て進めるのが適当であると考えるものである。

なお、横風用滑走路計画用地を、現滑走路と平行滑走路間の航空機の地上通路として整備したいという国の方針については、横風用滑走路とは別の問題として、これを理解することとしたい。

(三) 騒音対策

航空機の利用は近年増大しつつあるが、空港周辺に及ぼす騒音の問題はそのアキレス腱であり、特に我が国のように高密度居住社会では、深刻な社会問題となっている。機材改良などの発生源対策や民家防音工事などの施策が制度的に進められているが、地域社会との騒音をめぐってのあつれきは今なお跡を絶たない。

成田空港は、内陸空港であることから、騒音問題は、空港が地域社会からその解決を要請される最大のものであり、円卓会議において関係自治体や多数の地域住民からその対策強化の要望が出された。

国は第十一回の会議において、発生源対策、深夜発着便の調整、全体の発着回数管理や、さらには民家防音工事の強化、防音堤・防音林の増強、騒音研究機関の設置などの施策を進めるほか、騒音直下の住民が移転を希望する場合の対応策など広汎な施策の検討とその実施を約束した。このほ

かにも、航空機からの氷塊などの落下物や空港内でのエンジンテストに伴う騒音など、住民に迷惑をかけている様々の問題について対応を求める発言があり、国はその解決に取組む方針を示した。国は、円卓会議で表明したこれらの事柄を、確実に実施することとされたい。

以上述べたような騒音をはじめとする各種の問題への対応の仕方いかんは、地域の住民感情を直接に左右する大変重要な事柄である。残念ながら、これらの問題をめぐって住民の間に深刻な不信感を生み出してしまっていることが、紛争を激化させ長期化させた一大要因であるので、国は円卓会議で表明した方針に従い、共生懇の場を活用して施策を着実に進め、住民の切実な要望にこたえられたい。

七、地域振興策について

地域振興策について論ずる際の原点は、現空港が地域社会にもたらした数々のデメリットを解決するための施策を、国がすみやかに提案して、住民との間の信頼関係を回復することで行わなければならない。いわゆる地域振興策は、この原点の上に展開されることにより、はじめて地域社会のすべての立場の住民の期待にこたえるものとなるであろう。

円卓会議では、関係自治体や住民代表から、空港をめぐる地域が空港と共生し発展するための方策として、鉄道、道路など様々の公共施設の整備の要望が提出された。空港の存在が地域にとってプラスであるという結果を生み出すことは、将来の地域と空港との共生を実現するために必要であると考えられるので、国や県はそのために必要な措置を講ずるよう努力されたい。

会議でも関係自治体から表明されたように、また県の実施した地域調査からも明らかのように、空港の出現によりその表側と裏側とで地域社会にかなり発展の格差が発生した。また空港によって侵害され

た緑の環境、地下水の問題なども今後解決されなければならぬ。これらの問題が前向きに解決されることにより、空港をめぐる地域社会相互の理解と一体感が深まり、手を携えて地域の未来を築く営みが続けられることを期待する。

またこの際、空港をめぐる地域内でのいわゆる乱開発や廃棄物の不法投棄などが地域社会に与えている負のインパクトについても言及しておきたい。空港の出現はその地域の経済を活性化させる効果を持つが、それはいわゆる開発行為が適切な規制によって地域と調和を保ちながら正しく進められることにより、はじめて可能となるものであり、そのような考え方が広く関係者に行き渡ることが先決である。県や関係自治体の努力により、空港をめぐる地域社会が他の模範となるような町づくりを進めて行くことを強く期待したい。各種の社会資本の整備のみが地域振興の基盤になるのではなく、以上のような側面の整備も同じ重要さを持つ課題であることに特に注意を喚起したい。

八・むすび

シンポジウム、円卓会議と続いた成田空港問題についての対話の場合は、約三年の月日を経ていよいよその終結を迎えることとなった。対話の回を重ね率直に意見を述べあう度に、関係者間の相互理解が増し、信頼関係ができて行ってきたことはまことに貴重な成果であり、この上に立って今後における地域と空港との共生のための具体的な行動が展開されれば、それは必ずや成功し、地域の将来の発展へとつながって行くものと信ずる。

そのような信頼関係の構築があつてはじめて、成田空港問題をめぐるいわゆる対立構造は解消されることとなる。こうした結末を見るに至ったのは、円卓会議に参加されたすべての方々の努力と支援の賜であり、会議を主催した我々として深く謝意を表したい。

わけても反対同盟の方々は、三年間を通じて常に理性的な話し合いの精神を忘れず、四半世紀にわたる闘争の中で構築された豊かな発想と表現をもって、国などとの間で激しい議論のやりとりを重ねつつ、相互にこの問題のあるべき姿を探る努力が粘り強く続けられた。円卓会議がこのような結末を迎え得たことは、地域社会の将来に大きなプラスをもたらすこととなると信ずるが、そのために反対運動の果たした役割には極めて大きいものがあつたことを強調したい。

このような全力投入により、強行的な空港建設に反対する目的のもとに展開された反対運動は、国側の空港建設行政の在り方を大きく変革したという点で後世に遺る成果を達成したと見る事ができよう。今後は、これまでの経験を生かして地域社会再生のために力を尽くされたい。また地域住民の方々も闘争の成果を評価し、共に手を携えて進むようになることを切に望みたい。

なお、四半世紀を超える紛争の中で生み出された住民の不信感には根強いものがあるが、円卓会議の成果を踏まえて、残された不信感の解消に今一息の努力を切望したい。

シンポジウム、円卓会議を通じて、運輸省は、これまでの経緯にこだわらず、反省すべきことは率直に反省し、修正すべき点は修正し、今後の建設計画についてもぎりぎりの提案をするなど誠意をもって対応した。この点は行政の姿勢として高く評価したい。また、千葉県当局がこの間にあって果たした調整の努力は並々ならぬものがあり、成田空港をその域内に持つ地方自治体としての期待にこたえたことを併せて高く評価するものである。さらに、関係市町や地域住民団体も、円卓会議に積極的に参画され、会議の成果を高めるために大きな貢献をされたことに感謝したい。

一九六六(昭四十二)年の閣議決定以来二十八年を

超える年月は決して短いものではなかった。この間地域社会には様々の波が押し寄せ、住民のすべてが大変な苦勞を強いられて来た。今後これを明るく未来を拓く方向へ進めていくことができなければ、二十八年間の苦勞は何であつたかということになろう。その歴史と経緯から学びつつ、国をはじめとする行政当局、地域住民のすべての方々が、円卓会議の結を機に、これまでの行きがかりを乗り越えて、成田空港をめぐる地域社会の再生と再建のために智慧と力を尽くされることを期待する。

なお、シンポジウムに引続いて円卓会議にも、熱田派以外の反対同盟の方々の参加を得ることのできなかったのは、極めて残念である。これらの方々の間の話し合いを実現し、今回と同じような問題解決の道が開かれるよう、我々は必要な行動をいつでも取る用意がある。成田空港問題が、この地域に住むすべての方々にとって解決される平和の日の来ることを心から願うものである。

終わりに、この三年間、会議のための事務局の仕事を受けてくださった県および関係自治体の職員の方々のご苦勞に対し厚く御礼を申し上げます。そして、会議場に出席して熱心に議論を聴いてくださった地域住民の方々にも心から感謝したい。この方々の静かなしかし力強い声援なしには、会議の長丁場を切りぬけることはできなかったであろう。

シンポジウムの終結の時にも述べたように、三年間の営みは、現代の日本に真の民主主義を定着させることができるかどうかについての壮大な実験であった。幸いにしてここに終結を見ることができたのであるが、我が国の他の行政部門においても、このような民主的手法をモデルとして、様々の営みが展開されることを期待したい。現代の我が国が各分野で抱えるこの種の困難な問題の解決のために、この地において関係者の皆さんと共に苦勞した成果が良き先例として生かされることを強く希望して、我々

の所見を結びたい。

以上です。

隅谷 三喜男
高橋 寿夫
宇沢 弘文
山本 雄二郎
河宮 信郎

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

以上が、我々調査団の最終ともいべき所見であります。

この所見は、先程も申し上げましたように、各組織のほうからいろいろなご意見をいただきながらつくりましたので、大綱については比較的早く、ここに並んでおられる方々のところにお伝えし、それに対して、今日読みましたところも踏まえて、各組織からのご所見を發表していただきたいわけですが、この最終的なものは、実は本日ここに集まった時にはじめて皆さんのほうにも配布いたしましたので、ここに並んでいる方



々に対してもそれほど時間的な差はなくてお渡ししたというような事情にあることを、これから所見の發表をいただきます皆さんに対して、一言お断りさせていただきたいと思うわけでありませう。

参加者の意見発表

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

それではまず、今日は私の右側に並んでいるほうからの順序で發表していただきますので、はじめに松尾運輸次官のほうから願います。

松尾道彦（運輸省事務次官）

まず冒頭にお詫びを申し上げます。亀井運輸大臣、今、二時五分過ぎに国会を出て、この空港の担当の直接の責任者としてこの会場にご出席いただきまして、直接御礼のご挨拶を申し上げます。こういう大臣自らの決意の下に、本来ならば予算委員会の大変難しい中でございますが、ご承認を賜りまして、今こちらに向かつております。たぶん車の中で駆け足しているのではないかと思います。近く登場してご挨拶を申し上げます。航空局長の土坂も一緒にその車で登場しますので、しばらく私、前官礼遇で局長の代行を務めさせていただきますと思います。よろしく願います。隅谷調査団からお示しいただきました所見は、空港をめぐる対立構造を解消し、成田空港問題の解決を図る見地から、地域の実情、自治体の意向、国の立場、反対同盟の主張などすべてに配慮されたものと受け止めております。

私どもとしては長きにわたる対立構造を解消し、地域に平和をもたらすことを願ひ、地域と共生できる空港づくりを進めるとの気持ちを込めて、これを受け入

れさせていただきます。所見にもあるとおり、私どもは、これまでの円卓会議において共生懇談会への取り組み、地球的課題の実験村構想の具体化、騒音対策の充実などについて申し上げてまいりましたが、お約束したことについては、誠意をもってその実現を図ってまいりたいと考えております。

また、円卓会議において議論された地域振興に関する諸課題についても、所見に述べられているように、千葉県などの緊密な連携と協力の下に、政府全体として積極的に推進してまいりたいと考えています。円卓会議で、今後の成田空港の整備を民主的な手続きで進めていくことが合意されれば、これにより成田空港をめぐる対立構造が解消し、成田空港問題は新しい局面を迎えることとなると考えております。

私どもとしては、今後円卓会議の結論を最大限尊重してその実現に努めると共に、今後は、これまでの空港づくりの反省の上に立って誠意を持って話し合いを行うことにより、用地の取得や騒音移転の問題の解決に全力を尽くし、地域と共生できる成田空港の整備に積極的に取り組んでまいりたいと思っております。

また、この円卓会議に参加されなかった農民の方々とも、シンポジウムや円卓会議を通じて培ってきた話し合いの精神を大切にして、問題解決のため努力していきたいと考えております。どうかよろしく願ひ申し上げます。

最後に当たり、この所見をとりまわっていただいた隅谷調査団の先生方、千葉県をはじめとする地元自治体の関係者、住民代表の方々に対し、深く感謝申し上げます。また、問題解決に向けた反対同盟の皆さんの三年間にわたる真摯な対話への取り組みに対し、心から敬意を表するものであります。

最後になりましたが、この円卓会議における議論について見守ってくださった地域の方々には御礼申し上げますと共に、円卓会議の会場およびその周辺の安全確保にご尽力いただいた警備当局に対して心から感謝申し

上げます。
本当にありがとうございます。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。ただ今の運輸次官は、シンポジウムのごとき以来、この席に座っておられて、成田空港問題についてはよくご存じであることは皆さんもご承知と思います。

ただいま運輸次官のほうからお話のあったことは、運輸省としての見解であります。それで大臣がお見えになったら、大臣は大臣としてご意見なりご感想なりを言われると思います。

それでは、次に、空港公団総裁のほうにお願いいたします。

中村 徹（空港公団総裁）

空港公団総裁の中村でございます。本日、円卓会議の最終回ということで、隅谷調査団の先生方、所見をおまじめいただきまして、誠にありがとうございます。また、空港公団といたしまして、意見発表の機会を持たせていただきましたことにも、厚く御礼を申し上げます。

それでは、私たちの意見を發表させていただきます。先程、隅谷調査団から成田空港をめぐる対立の構造を解消し、成田空港問題を解決するための所見が示されました。私どもは、直接現地で空港を建設し、運用する者として、この所見をこれまでの私どもの空港づくりに対するご叱責と、併せて今後進むべき道をお示しいただいたものと受け止め、深く思いをいたすと共に重いものと認識し、これを受け入れさせていただきます。

また、この円卓会議の終結に当たって、そもそも私どもの空港づくりが原因となつて生じてしまった成田空港問題について何としても解決すべきとお気持ちで、シンポジウム、円卓会議と長きにわたりご尽力い

ただいま隅谷調査団や、終始理性的かつ真摯な取り組みにより円卓会議での議論や認識を深めていただいた反対同盟の皆さん、いろいろの立場や形でご努力くださいました多くの関係者の方々に心よりお礼申し上げます。次第です。

私どもは、シンポジウムや円卓会議で議論されてきたように、成田空港問題の原因は、私どもが、空港を早くつくりたいとの強い気持ちから、一方的な空港づくりを行ってきたために、対立の構造を生じさせてしまったことにあるとの認識を忘れてはならないと考えています。また、反対同盟をはじめ関係者の方々からこれまでの私どもの空港整備や運用に対する不信任を率直にご指摘いただいたことを重く受け止め、肝に銘じてまいる考えです。

そして、私どもは、二度とこのような事態が生じないようにするという反省のもとに、円卓会議における約束事項を実施することはもちろんのこと、騒音問題など地域にとつてマイナスの影響を生じさせることへの対応については一所懸命取り組んでまいります。さらに、空港の持つ可能性や活力を地域に積極的に活用していただけるような施策についても、一つ一つ着実に取り組んでいく考えであります。そして、そのような取り組みや共生懇談会に対する誠実な対応などを通じて地域の方々と間に信頼関係を築き、地域の一員として受け入れていただける空港をつくりあげられるべく努力してまいる考えです。

なお、その際、調査団所見の「滑走路計画については」で示された民主的な建設の手法を遵守してまいることは当然であります。

今後の空港づくりに当たっては、以上のような認識や心構えのもとに、これまでのシンポジウムや円卓会議での議論を十分に踏まえて、空港計画地内および周辺地域の方々と誠意を持って話し合いを行ってまいりたいと考えております。その際、空港計画地と周辺地域を一体的な視野でみるという認識を大事にすると共

に、移転をお願いする方々の様々なお考え、お気持ちを伺いながら、あくまで誠意を持って話し合いを進めるといふ心構えに立つて空港づくりを進めてまいる考えであります。さらに、第五回円卓会議で運輸省が申し上げた「空港と地域との共生に関する基本的な考え」の精神を常に念頭に置いて、地域と共生できる空港づくり、空港の運用を行ってまいりたいと考えております。

残念ながらこの円卓会議に参加されなかった方々に對しても、私どもはシンポジウムや円卓会議において議論されたことや学んだことを活かし、空港の立地をお願いしたために生じてしまった問題などについて、きちんと話し合いをさせていただくことから努力を始めたいと思っております。

本日この所見をいただき、今日が私どもにとりまして新しいスタート点と受け止め、空港建設、運用についての歴史的反省の上に立つて、私をはじめ、役員が総力を挙げて取り組んでまいる決意でありますので、地域の皆様のご理解とご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。

最後に重ねて隅谷調査団、反対同盟、千葉県、関係自治体、民間団体の代表の方、あるいはこの円卓会議をあたたく見守ってくださいました多くの方々、さらには警備当局に厚く感謝申し上げます。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。

こういうことを私が申すことはいかがかと思ひながら、ただいまの公団総裁のお話を伺っております、一言だけ申させていただきますという思いが非常に切実なので、ちょっと申し上げたいのですが、私たちの最終所見の中でも多少触れましたが、この地域の中の一歩基本的な問題はやはりある種の「不信任」というものにあるということを私たちはひしひしと感じております。そういうことを公団総裁は、まともに受け止



められました、そういうことを反省し、最後のところ
で言われたように「新しいスタート点に立っている」
と、こういうお考えを持って今後取り組んでいこうと
されていることに対して、私は非常に大きな期待を持
つものであり、地域の皆さんもどうか、そういう公団
総裁の大変誠意のこもったご発言を受け止めていただ
ければ幸いと思う次第であります。余計なことを申し
上げました。

それでは次に、千葉県知事、お願いいたします。

沼田 武（千葉県知事）

地元の千葉県知事の沼田でございますが、知事とし
ての発言をさせていただきます。

一・はじめに

先程、隅谷調査団から円卓会議の最終所見が発表
されましたが、成田空港問題二十八年の歴史に思い
をいたし、また「シンポジウム」「円卓会議」を通じ、
一貫して守りとおされてきた話し合い精神の成果と
して、深い感銘をもって伺わせていただきました。
今日、このように円卓会議の最終段階を迎えること
ができましたのは、会議参加者の積極的な姿勢にあ
つたことは言うまでもありませんが、それ以上に、
この会議を見守り、支持していただいた地域住民の
皆様と周辺自治体のおかげであったと存じます。事
務局を預かりました千葉県としてここに改めて厚く
感謝申し上げます。

さて、この会議に臨むに当たり、所見を検討させ
ていただきましたが、私ども千葉県といたしまして
は、この所見の内容は、円卓会議に提示されてきた
諸課題について、的確な見解が示されているものと
高く評価し、これを全面的に受け入れることを表明
いたします。また、去る七日には、空港周辺十一市
町村長にお集まりいただき、この所見の骨子をお示
いたしました。また、すべての市町村から、「県と歩調
を合わせこの所見に合意すると共に、これを契機に
新たな地域づくりに取り組むたい」という意見をい
ただきましたので、併せて報告させていただきます。

二・「対立構造の解消」について

成田空港問題の平和的解決に向けて、話し合いの
テーブルについてから三年、ここに大きな成果を納
めることとなったのは、円卓会議に至って、空港問
題を地域の問題としてとらえなおそうという参加者
の意識の改革がなされたからだと思えます。ま
ず、「空港によってメリットを受ける人と、デメリッ
トを受ける人は必ずしも同一ではない」という意見
が出され、地域の内部が「一様な構造ではない」という
認識が行われると共に、「地域にとって空港とは何
か」という検証が行われるに至りました。

そして本年二月に行われた第五回円卓会議では、

国のいわゆる「共生論」が発表され、国策として空
港を整備したいとする運輸省もまた、地域の視点か
ら空港を見つめ直すという姿勢に行きつくこととな
りました。その後、反対同盟から「対立構造の解消」
という提案がなされましたが、この提案によって、
「地域のために」という円卓会議の本質的課題が明
示されることとなりました。私は第一回円卓会議に
おいて「この地域に対立と葛藤がある」という思い
を述べ、地域としての二十八年間の苦悩はこの一点
に集約されると考えてきたところでありましたが、反
対同盟の積極的な提案によって、その認識は一層明
確になり、解決に向かう出口は大きくおし開かれた
と実感いたしました。むしろこの時「対立構造の解
消」は半ば達成されていたと言って過言ではないと
存じます。

シンポジウムのはじめに当たっては、参加者がそ
れぞれの峰を目指しているかのように見えた話し合
いも、頂きをきわめてみれば、同じ峰を登っていた
ことが確認されました。反対同盟が、農の営みの中
でむら社会を守るといふ地域からの闘いを続け、登
りつめてきた地点に、他の参加者も、それぞれ異な
った登山道を経て出会い、「対立構造の解消」という
頂上の同じ土を踏むことができたのだと存じます。

このことは、反対同盟の理念が常に「地域から見た
空港の在り方」を問うものであり、そこでちとら
れたものは画期的な騒音対策の拡充や地域対策、さ
らには民主的な空港づくりであったということが明
らかなったのであります。私たちは反対同盟のこ
の成果を正しく評価し、これからの地域づくりにつ
いても、その原点を生かしつつ、共に力を尽くして
いただくよう願うものであります。

三・今後の県の取り組みについて

さて、隅谷調査団の所見には、今後県として取り
組むべきいくつかの課題についてその道筋が示され
ました。



まず、「共生懇談会」についてであります。円卓会議の成果を実質的に存続させていくために、大変重要な組織であると考えるところであります。特に、「共生懇談会」は空港の建設や運用に当たって地域に対するマイナス面を点検するという役割を果たす以上、これまで主として反対同盟が担ってきた役割を、この組織が受け継いでいくという側面もありませんので、より公正な組織づくりと運営が求められて

いるところであります。所見では、地域振興連絡協議会のカサの下に独立の機関として設置するよう提案されておりますので、県が中心となり、この組織づくりを着実に進めてまいりたいと考えております。「地球的課題の実験村」につきましては、所見においてこの構想の高い理念を認め、その実現に強い意向を示しております。当面、運輸省の中に検討委員会を設けていくこととしておりますが、県としてもそのメンバーの一人として力を尽くすことはもちろん、その具体化に当たっては積極的に協力してまいりたいと存じます。

しかしながら、この構想の持つ本来の意義は、反対同盟が自ら土に働きかけてきたことを通じて到達した理念であり、また同じくその実践によってのみ現実的な成果を成し遂げることができるともいえずと考えます。したがって、反対同盟の主体的な取り組みこそが、この構想に生命を与えるものであることを、改めて申し上げたいと思っております。次に、地域振興の進め方について申し上げます。

所見では、空港をめぐる乱開発等、負のインパクトについて言及されており、また、円卓会議において、反対同盟から提案された「児孫のために自由を律す」という理念でも、開発と抑制の調和がいかに重要な視点であるかという問題の提起であったと存じます。空港という巨大な経済力を放置すれば、その影響力は地域の無秩序な開発へとつながっていくことも事実でございます。空港整備と平行して、先見性を持った地域振興を図っていくためには、その基幹となる高規格道路や空港導入路の計画、また計画の人口配置を可能にする鉄道網の整備などは、国が進めていく必要がありますし、これに伴う産業配置や住宅建設、生活環境整備などは、県と市町村が推進すべきものと考えます。

県では、現在「成田空港周辺地域振興計画」を策定中ですが、その主要なテーマは自然環境や

地域特性を生かしながら、空港の持つインパクトを地域全体に波及させ、いかにして均衡と調和のとれた発展を果たしていくかということであろうと思っております。そのためには、計画的土地利用を進めるために騒特法に基づく都市計画決定も推進してまいりたいと考えております。

四. おわりに

シンポジウム、円卓会議を通じて続けられてまいりました話し合いもここに終結の時を迎えることとなりました。この三年間で、二十八年の歴史のすべての問題が論議し尽くされたとは言えないにしても、成田空港問題の基本的問題については真剣に取り組み、理性的な到達点を得ることができたと信じております。残念ながら、この会議に参加していただくことができなかった関係者の皆様にも、この会議の、私心を離れた論議の経過をご理解いただきたくと存じます。

成田空港問題は、戦後の歴史の大きなうねりの一つとして社会的な関心を集め、その行方が注目されたのでありますが、幸いにも今日平和の話し合いによりその終焉を見ることができました。これもひとえに、行事役としての隅谷調査団のご尽力のたまものと存じます。ここに改めて深く感謝申し上げます次第であります。

最後になりますが、本会議の開催を支えていただきました警備当局のご努力に対し、心からお礼申し上げます次第でございます。なお、運輸大臣も予算委員会で非常にお忙しい中を、わざわざご出席いただきまして、本当にありがとうございます。

隅谷三喜男（隅谷調査団团长）

どうもありがとうございます。今後千葉県にいろいろお願いしなければならぬことが多いと思いますので、改めてまたお願いなり何なりはいたしますが、どうもありがとうございます。

亀井運輸大臣、お着きになったのでありますが、しばらくここに居ることができ、また予算委員会がおりだと思いますが、しばらくはおられるということでありますので、せっかくの機会ですから、もうちょっと発言を聞いていただいて、その上で運輸大臣からご発言いただきたいと思っております。

それでは次に、こちら側にまいりまして、成田市長さんからお願いします。

長谷川録太郎（成田市長）

それでは発言させていただきます。私は成田市長の長谷川でございます。

ただいま調査団の所見を聞かせていただきましたが、私成田市長といたしまして、基本的にはこれを受け入れたいと思っております。国および空港公団は空港と地域との共生の観点から、これを真摯に受け止め、騒音対策をはじめ諸々の事業について積極的に対応されますようお願い申し上げます。

私は、以前から平行滑走路と横風用滑走路を共に整備すべきであると主張してきたわけですが、所見におきましては平行滑走路は必要であるが、横風用滑走路については平行滑走路完成後改めて環境等への影響を調査の上、地域住民と十分な話し合いのもと進めるべきとのことであります。これは、横風用滑走路が将来にわたって否定されたものではありませんし、長い間続いた対立構造を解消するための現実的な解決策としてやむを得ないものと思っております。

しかしながら、将来的にはやはり運輸の安全上からも横風用滑走路を整備し、真の完全空港を目指さなければならぬと考えます。空港の完全化こそアジアのハブ空港としての立場を確固たるものとすると同時に、国際社会における重要な役割を担うこととなるものと信じております。もちろん、騒音対策をはじめ地域振興対策は大前提であることは申し上げるまでもございません。さらにこれを機に今回の貴重な経験を教訓と

し、空港計画予定地関係者と誠意をもって話し合いされることを強く望むものであります。私も地元市長として、関係者と誠意をもって話し合い、将来に禍根を残すことがないように、解決しなければならぬものと再認識した次第であります。

終わりに、円卓会議が今回で終了するわけですが、成田空港問題については、まだまだ難題が山積しております。本当の意味でこれからが一番大事な時期であります。今までご尽力くださいました調査団の先生方におかれましては、成田空港問題解決に向け今後とも係りあいを持っていただきご指導を賜りますようお願い申し上げます。私の意見とさせていただきます。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。それでは次に、芝山町長さんですね。お願いします。

内田裕雄（芝山町長）

ただいまご紹介いただきました芝山町長の内田でございます。円卓会議最終回に当たりまして、要点のみの所見を述べさせていただきます。

本日、隅谷調査団からご所見が示されましたが、これは四半世紀を超える成田空港問題の総括的な結論として厳粛な気持ちで受け止めたいと存じます。あの怒号のうずまく、賛成、反対の嵐の中から、今日まで引きずられてきたこの地の「対立構造」が、この所見によって、理性的に解決されてきたことを実感するものでございます。そして、私どもにとつて大変切実な、民家防音工事や移転対策の拡充など騒音対策、そして鉄道や道路等、公共施設の整備など地域振興策も含めて、極めてバランスのとれた所見が示されたことに感謝をいたしたいと存じます。このことは、円卓会議参加者全員の努力はもちろんのこと、長きにわたり成田空港問題の解決に向けて目を向けてこられた方々の熱

意をお汲み取りいただいたものと考えます。

また、同時に、何と言つても反対同盟からの的確かつ真剣な議論が、空港と地域が共生できる論理を確立すると共に、より良い地域づくりの方向づけがされたのではないかと考えるところであります。同盟の皆様方にあつては、過去のわだかまりを捨てて、これまでの経緯を十分生かしていただき、共に地域づくりを進められることを願うものであります。これらの状況を受けて、国においては、地域の実情を十分汲み取り、ぎりぎりの英断によつて、最終提案がされたことについて、高く評価するものであります。

今まで、何度も述べてきましたように、我が町は、空港の整備により騒音をまともに受けざるを得ませんでした。後、今後の課題として、関係機関が約束した事項について必ず守っていただきたいと思っております。さらに今までに発言いたしました要望等十分尊重され、できるだけ早期に具体化に向けて、積極的に取り組んでいただくよう提言いたす次第であります。そういう前提の中で、新しい地域づくりを町民一体となつて進める覚悟がありますが、今回のご所見をもとに、明日に向けてさらに一層の努力をしてまいりたいと存じます。どうか関係する皆様方のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。それでは、自治体のほうの代表として最後に、多古町長さん、お願いします。

菅澤重矩（多古町長）

ご紹介いただきました多古町長の菅澤でございます。成田空港問題シンポジウムと円卓会議は、隅谷調査団の先生方を中心とした関係者による、日本の民主主義を定着させる壮大な実験の場でした。そしてここに、「隅谷所見」をもつて、終結を見るに至ったことについ

て、関係者の長いご努力に深い敬意と感謝を申し上げます。今後は、この所見に基づき、国、公団、県、関係自治体、同盟を含めた地域住民が心を一つにして、成田空港問題を解決していくことが求められております。地域民主主義を育て、共生懇談会、実験村、そして空港と地域の共生の実現など、我々はすべての行きがかりを越えて、人間としての英知を結集し、地域の明るい未来実現のために、共に最善の努力を傾注していかねばなりません。

ここで留意すべきことは、共生懇談会が機能し、実験村の具体化など、空港と地域の共生が実現していく中で、空港の整備だけが遅々として進まないような状況が生じた場合、空港に期待する多くの人々の不信、失望、苛立ちがつのることとなり、地域の中に新たな対立の構造が生まれかねないという点であります。そのような対立の構造が生じた場合、少数の意見は単なる利己的なエゴイズムとしか受け止められず、円卓会議を通じて培われてきた少数意見も尊重するという民主主義の原則すら崩壊するようなことにもなりかねません。これは同時に地域民主主義の崩壊であり、我々が一番憂えることでもあります。

今ここに、国と反対同盟の対立の構造が消え、民主主義の原理、原則が実践されていく時に、地域の中に新たな対立構造がよもや生ずることがあれば、それは地域にとって最大の不幸であり、自戒すべきことでもあります。そのためにも関係各位の従来立場にとらわれない建設的対応が、より一層求められていくと思えます。

我々は、三年有余の努力の成果を誇りあるものとし、それを次代に引き継ぐことが、我々世代に課せられた責務であることを肝に銘じ、またこの機会を逸すれば、地域の発展も未来の展望もないことを十分認識し、対処していかなければなりません。今後、関係の皆様方のお一層のご指導、ご協力をお願いいたしまして、私の発言といたします。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。ただいま関係市町の長の方からそれぞれにご見解をいただいたわけであり、それでは、次は三団体ですが、それぞれおやりになりますか。

そうしますと、ちょっと時間の都合がありまして、全部終わってから運輸大臣のお話を聞くかなと思いましたが、もし時間が足りなくなると、せっかく大臣…。（大臣より「どうぞ、結構ですよ」との指示あり）

それでは、全部聞いたところで、運輸大臣のほうから…。

それでは、鬼澤さん。どうぞ。

鬼澤伸夫（成田空港対策協議会）

まずお詫び申し上げますが、本日、私どもペーパーを用意しておりませんが、本日は、私もゆっくり読ませていただきます。本日の所見は、我々地域三団体が第十一回円卓会議で発表した「円卓会議終結に向けて」の意見を基本的に取り入れていただき、評価と感謝を申し上げます。

シンポジウム、円卓会議を通じて導かれた成田空港問題の解決は、対立構造の平和的解消という、大変な成果を得ようとしております。地域問題に携わるすべての団体、組織が参加して築き上げたこの成果の偉大さは、今にわかに評価されないと、徐々に参加した者に理解され、伝わっていくはずであります。同時に、次の世代への大きな贈物にもなると考えます。

地域民間団体にとっても、この三年間の意義は大変大きいもので、三年間において成田空港問題への理解を深めることが可能となったばかりか、地域民間団体に地域をより良くする行動を生んだのです。試行錯誤の結果導かれた円卓会議の結論は、より良き地域社会の建設につながることを確信いたします。三年間に地域には大きな変化がもたらされました。議論で問題を解決すること、民間団体が主張し、それが行政施策に

反映されること。とりもなおさず民間同士、また民と官が話し合い、力を合わせるなど、多大な成果がもたらされたことと評価いたします。

空港周辺地域に展開された壮大なる実験とは、このような地域が互いに力を合わせて、より良い地域づくりのための行動であったわけであり、この成果を今後継続する必要があるはずで、現在空港と地域の共生に向けてはスタートラインに立った状況になったのであります。今後の国、県、地方自治体、公団の役割は非常に大きいものです。試行錯誤の末に円卓会議の結論を導いた過程、いわゆるプロセスを忘れず、今後とも努力を継続していただきたいと思えます。その行動が持続されるならば、地域民主主義の定着も夢ではないはずであります。『ボタンの掛け違い』や非民主的強制手段の行使がもたらした対立構造が、シンポジウムで検証され、円卓会議で解消へ向かえたのであり、空港に協力してきた多くの人たちの思いを考えると、今後は、空港設置者と、地権者をはじめとする関係者が、今回の結論に沿って民主的に話し合い、最後の解決へ向けて努力することを強く期待いたします、私の意見といたします。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。

それでは次に、相川さん、お願いします。

相川勝重（ネットワーク芝山21）

それでは、ネットワーク芝山21から発言させていただきます。

円卓会議の終わりに当たって

シンポジウムから円卓会議、この三年間に及ぶ隅谷調査団をはじめとする多くの関係者の方々の努力に心から感謝申し上げます。本日提起されました隅谷調査



団の最終所見は、四半世紀を超える「成田空港問題」を、敵対的対立から民主主義を基本とする合意形成による解決へ、さらにはその後の地域振興への視野を含んだ優れた見解と理解し、私たち「ネットワーク芝山21」といたしましたが、所見を積極的に受け入れ、今後の地域づくりの一翼を責任をもって担っていきたいと思います。

この三年間の出来事は、私たち地域住民に大きな成果をもたらしました。国と反対同盟との長い対立は、周辺の地域住民にとって、「空港問題は国と反対同盟だけの問題、私たちに与える問題ではない」との意

識を知らず知らずのうちに植えつけていました。空港問題は対岸の火事、地域づくりは空港問題が解決してから、このような考えが広範に広まり、長いこと地域の積極性を失わせてきました。しかし、シンポジウムから円卓会議に至る過程で、私たちは空港問題をも一度自分たちの問題として捉え返すことができ、むしろ空港問題に積極的に係っていくことが地域づくりに通じるとの自覚を獲得しました。

この三年間の粘り強い話し合いは、参加者全員が過去や現在にだけこだわらなく、常に希望もてる未来を見いだそうという強い意志を持ち、知恵を出しあい信頼関係を築いてきたと思います。途中、どの方向に進んでいくのか、立ち止まってしまおうのかという不安も感じましたが、それぞれが納得するまで話し合い議論をつくせば、かならず良い結論が生み出されるとの確信を育てました。シンポジウム・円卓会議もたらした最大の成果は、どのような困難な問題も民主主義の基本に立ち返り、信頼をベースとした話し合いを続けられれば解決できるという『期待感』を、この地域住民の貴重な体験としたことではないでしょうか。

私たち「ネットワーク芝山21」は、このような地域住民の『期待感』を核として、調査団所見にも示された『共生懇談会』に積極的に係り、民主主義をこの地に根づかせる責務を担っていきたく存じます。いまだにマニュアルのない世界にこの地域は踏み出します。どのように踏み込んでいけるか、前途にはまだまだ不安が横たわっていると思いますが、円卓会議の終結を『地域づくり、空港づくり』の新しい出発点として、お互いの立場や思いを尊重するすべての人々と共に、このいばらの道に第一歩を印したいと思います。大変長い間、ありがとうございました。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございました。
 それでは、三団体としては最後になりましたが、大

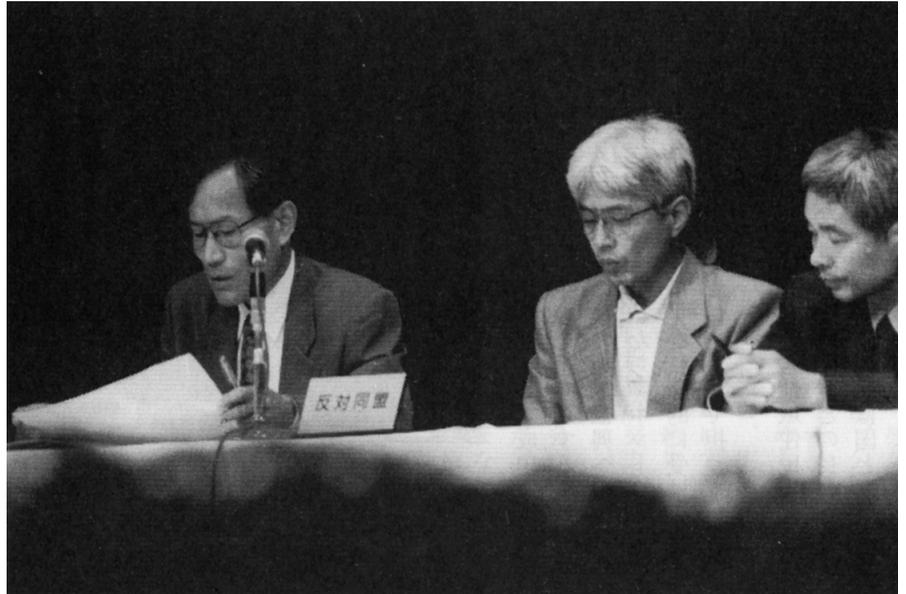
栄町青年会議の高木さん、お願いします。

高木吉夫（大栄町青年会議）

本日ここに、二十八年の長きにわたってこの地に困惑と混乱、そして対立関係をもたらしてきたいわゆる成田問題が、シンポジウム、円卓会議を通じた関係者の真摯な、そして建設的な討論を通して、終息と地域再建の糸口を探り当てることのできたことを、心から歓迎したいと思います。しかしながら、このような解決の道筋が、極めて長期間に及ぶ多大な犠牲と苦労の上にはじめて成し得たことを思う時、手放しで会議の成功を喜び合うことができないことも感じざるを得ません。

私たちは、この間、成田問題における民主主義の在り方を問い、地域と巨大開発である空港との共存の方法を問い続けてきました。私たちはこの七月、ドイツのミュンヘン空港等の視察を行い、ヨーロッパにおける開発と地域の在り方、市民生活のレベルに根づく市民生活と社会との係りの在り方などを学んできました。「成田問題の解決を模索する」という課題を持って視察に臨んだ私たちは、市民社会にごく当然のこととして根づいていた価値観に接し、成田問題との落差に愕然とする思いをもって帰国いたしました。ドイツにおいて当然のこととして存在する社会の有り様が、成田においては長い反対闘争と混乱、そして事態収拾に向けて関係者の粘り強い努力によってはじめて成し得たこと。そして、この解決に向けての原動力と日本における新しい価値観の創造とが、主として反対同盟の存在に負うものであることを改めて認識するものであります。

この円卓会議における「成田問題解決」への模索は、日本における民主主義の実験という位置付けがなされ、そして今後の展開が公正なルールにのっとり行われることを確認することができました。このこと自体、画期的な出来事であり、日本における民主主義の成熟



過程における重要な一里塚になることが期待されるものであります。また、今後の公共事業の新しい手法を編み出したという点においても、他の公共事業に波及していくことを念じてやみません。

しかし、この円卓会議の結論は、この地に二十八年に及んで蓄積されてきた問題について、解決のルールと手順を確認したものであり、決してこのことによって成田問題が解決するものでないことも確認しなくてはなりません。この円卓会議で合意された「成田方式」による成田問題解決への道の第一歩はこれから踏み出

されるわけであり、今後の展開こそが実は成田方式の真価を問われるものだと考えます。今後、関係者による相当長期間にわたる粘り強い努力が必要とされ、また地域社会にとっても具体的な対応が求められてくると思います。

今後の展開にとっては、共生懇談会の役割は非常に大きなウェイトを占めてくるわけであり、この共生懇談会を通じて公正なルールが守られ、地域社会と空港との共生が一步一歩実現していくことを期待してやみません。また、このような巨大開発がルールにのっとって行われ、その陰で泣きを見る人が一人でも出ることのないよう、共生懇は重要な役割を果たさねばならないと考えます。いわゆる成田問題というものが再びこの地に発生することのないよう、念じてやみません。

隅谷三喜男（隅谷調査団団長）

どうもありがとうございます。

我々の最終所見をお見せするのが大変遅くなったので、逆に、今鬼澤さんと高木さんのほうからは書類をいただいてないのですが、後からでも結構ですからいただきたいと思います。

それでは、最後になりましたが、反対同盟から石毛さん、お願いします。

石毛博道（反対同盟事務局長）

円卓会議終結にあたって

成田空港問題円卓会議は、シンポジウムで解明され確認された空港問題の根本原因を、参加者一同の議論によってさらに深く掘り下げ、成田のような過ちを二度と繰り返さないためのルールを確立することが、その最大の目標でした。本日提出された隅谷調査団最終所見は、そのような観点から、十分な言及がなされていると言えます。私たちは、調査団所見を受け入れま

す。

ここで、所見の内容に関連していくつかの点に触れたいと思います。

第一、滑走路問題について

私たちは、地球的課題の実験村を元B・C跡地につくるべきだと主張してきましたが、この考えにいささかの変更もあります。つまり滑走路増設計画そのものは認めておりません。しかしながら、滑走路の増設について、「あらゆる強制力を行使せず、共生懇の公正な光の下に地域住民との合意を形成しながら民主的につくるべし」とする調査団の建設の手法に対する見解は、円卓会議最大の成果とも言え、私たちは全面的に賛同いたします。

第二、反対同盟の今後の在り方について

円卓会議の場において、国はあらゆる強制力を放棄し、少数意見を尊重するとの認識が全体で確認され、そのうえ、空港建設についての民主的手法が確立されたことで、成田空港問題解決の道筋が明らかになりました。しかし、円卓会議で確認された様々な事項が実現されるかどうかは、今後の展開を待たなければなりません。滑走路建設に先立って、地域と空港の共生策が一つ一つ現実のものとなり、私たちの眼前に具体的な姿として現れたとき、初めての私たちの根強い公団不信は少しずつ解消されることになるでしょう。私たちは反対同盟を存続し、事態の推移を見守って行きます。

また、シンポジウム、円卓会議は、反対運動にとって「戦争状態の終結」という画期的な転換点をもたらしました。この新たな時代の中で、私たち自身も今後の有り様を模索しながら、着実に歩んでいく所存です。

最後に、三年余りに及ぶ、隅谷調査団の方々の言葉に尽くせぬ献身的な努力に対し、心から感謝を申し上げます。千葉県をはじめとする関係各位の皆様方にもお礼を申し上げます。そして、様々な試行錯



誤、苦悩の末、自らの方針転換を決断した運輸省の関係者に対し、心からの敬意を表します。本円卓会議の結論が全国各地で、国策が原因で苦闘している住民や住民運動にとって、一つの道標になることを念じつつ、私たちの意見表明といたします。

十月十一日

三里塚芝山連合空港反対同盟
事務局長 石毛 博道

隅谷三喜男（隅谷調査団团长）

どうもありがとうございます。
会場のほうからも拍手がございましたが、これで、調査団のほうからの最終所見、それに対する運輸省をはじめとする各組織の所見が全て述べられたわけであ

りますから、本日の円卓会議の主要な内容は以上で終わりでありますが、運輸大臣がお見えでありますし、今いろいろな方たちの所見の発表なども聞かれて、いろいろな思いもおりかと思いますが、ひとつせつかくですからお話し願います。

亀井静香（運輸大臣）

運輸大臣の亀井静香でございます。国会の関係で遅参してまいりましたことを、まずもってお詫びを申し上げたいと思います。

本日に長い間、隅谷調査団におかれましては、シンポジウムの開催、また、こうした円卓会議の開催と、大変献身的なご尽力を賜りまして、その結果、ご所見をおまとめいただき、ご提示をいただいたわけでありますが、先程私が遅参してまいりましたので事務次官のほうから表明させていただきましたが、国といたしましては全面的にこれを受け入れたい、このように考えております。これは、今までの空港建設の過程についての国としての深い反省に基づくところでもございます。この度のご所見、私どもも受け入れ、先程からお聞きしておりますと、反対同盟の皆様方、関係市町村、地元の住民代表の方々、それぞれ受け入れられるというところでございますので、まさに長い間続きました対立構造がここに解消し、一つのコンセンサスが生まれたと、このように認識いたします。

また、今までのご尽力の中で、ただ単に空港建設ということだけではなくて、文明と自然との関係、あるいは科学技術と公害との関係、そうした問題についても問題点が深く認識をされて、それが共生懇談会あるいはまた実験村というような構想の中で、これが息づいてきた、このように私どもは認識いたしているわけでございます。これはある意味では副産物と言っては失礼でございますが、我々現代文明社会に生きていく者として、どうしても真剣に取り組んでいかなければならない課題だと、このようにも考えているわけであ

あります。

私どもといたしましては、全面的に受け入れさせていただきましたので、今後、まさに住民の方々の具体的なコンセンサスづくりに全力を挙げて努力してまいりたいと思っておりますし、また、先程の実験村を含めまして、国として、運輸省だけではなくて各省挙げて取り組んでいかなければならない課題につきましては、総理にもその旨を私から報告いたし、総理からも全力を挙げて取り組むということも言っていたいただいておりますので、今後、国が責任を持って取り組んでいくということをお誓い申し上げたいと、このように思うわけであります。

私にとりまして、成田問題は非常に感慨深いことでもございます。お亡くなりになりました警察官の方、反対同盟の方、あるいは民間の方々、十一名にもほれる尊い犠牲があるわけであります。そういう方々の御霊にお応えするという意味でも今後、今日をステップとして全力を挙げて取り組んでいかなければならない、このように決意いたしております。

最後に、隅谷先生をはじめ調査団の諸先生方、反対同盟の皆様方、地元の方々、また関係市町村、事務局をご担当いただき大変ご尽力いただきました県の皆様方に、心から感謝申し上げたいと思っております。本当にありがとうございます。

また、このことにつきまして警備について大変ご苦勞いただきました警察の方々にも、心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

隅谷三喜男（隅谷調査団团长）

どうもありがとうございました。ただいま運輸大臣のご挨拶を伺っております。最後の、それぞれに対するお礼のこの前に言われました、この二十八年の間の闘争の中で亡くなられた方々のことに触れられましたが、大臣が特にそのことに触れられたことの意味を私は大変大切と思いました。どうもありがとうございます。

いました。

それでは、最後に、円卓会議を閉じることができるといふようになりましたこの最後の機会に、一言申し上げます。ぜひともお願いしたいと思っております。

本日の円卓会議の最初に、我々調査団がとりまとめました「成田空港問題円卓会議の終結に当たって」という一文を、この円卓会議に差し出したわけですが、それが、それに続いて、これをめぐって運輸省をはじめとしてそれぞれの組織のほうから賛成の意思表示をいただきました。運輸省・公団のほうもこれを「受け入れます」ということでありましたし、千葉県のほうもこれを「全面的に受け入れます」とあり、三自治体のほうも、表現は様々ではありますが、ともかくこれを受け入れて今後努力をしたいとありましたし、三団体のほうからもそれぞれに賛意を表わす言葉をいただきました。所見を「積極的に受け入れる」というように相川さんは言われたわけでありました。そして最後に、反対同盟のほうからも「私たちは調査団所見を受け入れます」、こういう言葉をいただきましたので、関係者の皆さんの賛同を得たということでも、もともと、その中には、これが大変だ、しつかりやってももらいたいというようなご要望もあったということも含めまして、十二回にわたる円卓会議がここに成功裡に終わりました、成田空港問題が基本的に解決に至ったことを、皆さんと共に喜びたいと思っております。

それで、私、ちょっとそういう文書を作りましたので、配っていただけますか。皆さんに配布いたしますまで、一分ほど……。

この文書は、最終的に皆さんの、ただいま申し上げましたような「賛成する」というような言葉をいただく前に、大体のご意向は承っておりますので、それに基づいて記しましたので、これから申しますが、多少この文面と違った表現になることもあるかと思っております。ただいま皆さんにお渡ししたものの上から五行目ぐらいのところを既に申し上げたわけでありまして、

この三年有餘にわたる間、関係者の皆さんは、大変激しい議論もいたしました。胸襟を開いて、相互に異なった相手の論点というものを理解し合って、そしてこの結論を得るに至ったのであります。この間の関係者の皆さんの熱意と努力に、調査団としても厚く御礼を申し上げます。

そもそも我々調査団は、そこに引用してありますように「成田空港問題の原因を究明し、その現状を明らかにし、併せて社会正義に適った解決の途を見出すことを目的とする調査団」という大変長い名前の調査団であります。そこで、これでは長過ぎるということで略称として、私が座長だということで「隅谷調査団」とか言っておりますが、正式の名称はこういう名称であります。

それで、十五回にわたるシンポジウムで、その名称の中にあります「原因の究明」あるいは「現状を明らかにする」は、大体解決をしたというふうな思っております。そして、本日を含める十二回に及ぶ円卓会議において、基本的な点で空港問題の、その名称の半ば頃に「社会正義に適った解決の途」というものを見出すのがこの調査団の目的だとありますが、その「解決の途」を見出し得たことを心から喜ぶものであります。

しかしながら、四半世紀を超える問題でありますので、残された具体的問題もありません。本日の「終結に当たって」において提起しました「共生懇」それから「実験村の検討委員会」などについても、まだまだ詰めなければならぬ問題が残っております。共生懇談会の「懇談会」という名称も適当かどうか、構成をどうしたらよいかというような問題が残っております。

これらを処理するために、円卓会議の運営委員会というものは、この円卓会議終結後もしばらく、言わば残務処理的な機関として残していただきまして、できるだけ早い機会に、共生懇と実験村関係の委員会を発足させたいと思っております。我々は、この二つの新しい組織が活発に機能して、成田空港と周辺地域が、共生

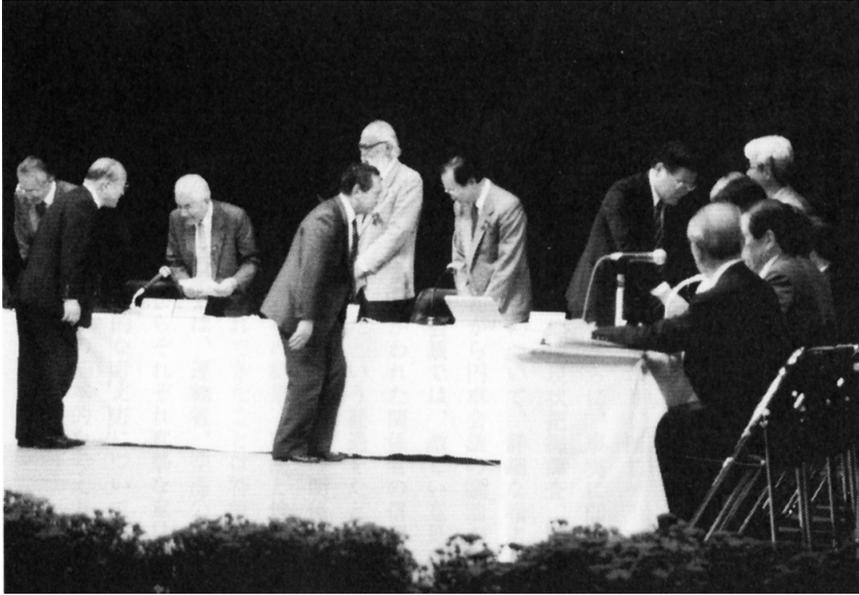
の実験村となることを期待して止まないわけでありまして。

ここで、長年にわたる成田空港問題の成果について私見をちょっと述べさせていただきますと思っております。反対同盟が単なる力による反対運動の枠を乗り越えて、第一回シンポジウムにおいて発表されました「徳政をもって一新を發せ」に始まり、第十回の円卓会議での「児孫のために自由を律す」に至るまで、反対運動の背後にある基本的な主張と思想を展開されました。これは、公権力に対する批判・反対の運動一般にも妥当する哲理を内包するもので、それが農民の闘争の中から力の対決を乗り越えて生み出されたということに特に大きな意義を私は感ずるものであります。これに対して国側も反対同盟の論ずるところに耳を傾け、従来の行政の在り方を乗り越えて、強制力は用いないことを確認し、土地収用裁決の申請を取り下げるなど、真摯に問題に対応してきたことを私は高く評価したいと思います。そこから関係者に広く賛同を得た『共生』の思想も生み出されたわけですが、今後、このような柔軟な行政の対応が広く取られるようになることを望んで止みません。

また、ここではあえて述べませんが、千葉県をはじめ関係の機関の大変なご協力を得たことを感謝したいと思います。

ともあれ、このような終着を見るに至るまでの長い間、空港をめぐる地域は暗雲に閉ざされて、地方行政組織、そこに住む住民とその組織との間にも、様々な意見の対立があり、その見解に基づいて空港予定地を立退いた、既に立退いた人々も少なからずおられます。そうした見解や対処の仕方の違いが感情的な対立にもなっており、空港建設過程の批判も根深くなり、相互不信感が根強いものとなっております。

そもそも共生とは、意見や利害を共通にするものが寄り集まって事を進めるといったものではありません。見解を異にし、立場の違う者が集まって意見を交換し、立



場の違いを調整し、一つの方向を見出していくということでありませぬ。そうした共生の途を求めて、従来の不信任を乗り越え、新しい明るい空港と地域の展開を熱望して止みませぬ。

最後に、円卓会議の結びで触れなかったことに一言触れておきたいと思ひます。それは一坪運動に係る点です。これは、我々が何らかの時に一坪をどうしろというような提言をすべきではなくて、国とのこうした対立構造が基本的に解消したわけですから、そういう状況を踏まえて、反対同盟自体の中で対応すべき問題であるというように考えたので、触れませんでした。

いずれにせよ、残された問題はなおいろいろありますが、基本的な方策の線に沿って話し合いによって解決していくことを期待して止みませぬ。

これをもって、この最後の円卓会議を閉じることにいたしましたと思ひます。ここにお集まりの方々に対しても厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

(拍手)

◆編集後記

この記録集は平成五年九月から六年十月まで十二回にわたって行われた成田空港問題円卓会議の全記録である。本編は円卓会議の内容と経過を忠実に記録するため速記録に基づいて作成し、資料編には円卓会議の過程で提出された全資料を収録した。これによって、円卓会議の全容を再現することができたと自負している。

ただ、忠実に記録するといっても、本編の場合、速記録をそのまま記載したのではなく、できるだけ読みやすいものにするよう配慮した。重複箇所を削除したり、表現の整合を保つために修正したりしたのがそれである。とくに目次については、円卓会議の展開に即して、どのような問題が取り上げられ、議論が進められてきたか、一見してわかるように工夫した。

円卓会議とシンポジウムの相異点を一つあげるとしたら、構成メンバーに地域の代表が加わり、同じテーブルについて多角的な議論を展開したことだろう。さらに、事実即した議論を行うために、千葉県から成田空港周辺地域現状把握調査、騒音地区居住者・空港関係移転者アンケート調査について、詳細な報告が行われた。

もっとも、最初から円卓会議の議論が軌道に乗ったわけではない。たとえば、第一回会議では、激しい意見の対立があった。しかし、シンポジウムでつちかわれた関係者の信頼感が根底にあって、議論が組み合うようになったという経過をたどっている。

そうしたなかで、空港と地域の関係はどうかをめぐって議論が深められた。その結果、空港と地域の共生について、次第にコンセンサスが形成されてきたことは特筆に値するといっていいたいだろう。

この円卓会議では、運輸省、空港公団、千葉県、地元自治体、地域住民、反対同盟からそれぞれ真摯な意見が述べられた。「空港と地域の共生に関する基本的な考え方について」（運輸省）、「共生を目指した今後の成田空港づくりの基本的な考え方」（千葉県）、「児孫のために自由

を律す」（反対同盟）などは歴史的文書として記録されるべき、深みのある、文明論的な視点をふまえた意見であり、成田空港問題の解決に向けて、一つの方向性を示唆したものであったように思われる。

この円卓会議で話し合われたことは「合意事項」として整理され、また後に成田空港地域共生委員会、「地球的課題の実験村」構想具体化検討委員会という形で結実して、次なる展開を導き出すところとなった。その基本理念である空港と地域の共生は成田空港問題の全関係者の英知を結集して創り出されたものである。とくに共生について、隅谷調査団長が第十二回会議で集約したように「共生とは意見や利害を共通するものが寄り集まって事を進めるということではない。見解を異にし、立場の違うものが集まって意見を交換し、立場の違いを調整し、一つの方向を見出していくことである」という命題が確認されたことの意義は大きい。

それらのことを正確に伝えなくてはならないというのが本記録集の最大の眼目であった。円卓会議の成果が正当に引き継がれ、それが成田空港問題解決の礎になるためには、原点がいずれにあるかを明らかにしたい、というのも本記録集作成の大きな目的の一つである。

この記録集の作成については、すでにシンポジウムの記録集を作成した経験が非常に役に立った。作業はひきつづき隅谷調査団、運輸省、空港公団、千葉県、反対同盟から参加した編集委員が中心となり、企画会社、印刷会社の協力を得て進められたが、無事に作業を終えることができたのは、編集委員の熱心な取り組みとチームワークのよさがあつたからである。

さらに、運輸省、空港公団、千葉県、反対同盟、また地域振興連絡協議会の支援と協力なしには、本記録集を刊行することはできなかっただろう。隅谷三喜男先生には、ご多忙のなか、発刊のことばを書いていただいた。とくに記して、お礼申し上げます。

編集委員紹介

山本雄二郎（隅谷調査団／高千穂商科大学教授）

北村 隆志（運輸省航空局）

井出 六美（運輸省航空局）

伊藤 齊（新東京国際空港公団）

大久保 仁（新東京国際空港公団）

岩澤 博行（新東京国際空港公団）

鈴木 敏之（新東京国際空港公団）

野村 敏雄（千葉県企画部空港地域振興課）

星合 幸夫（千葉県企画部空港地域振興課）

大塚 敦郎（反対同盟）

福田 克彦（反対同盟／元・小川プロダクション・スタッフ）

年表編成

松下 緑（フリーエディター）

編集協力

（有）アスク

成田空港問題円卓会議記録集

発行日 一九九六年三月三十一日

発行者 成田空港問題円卓会議記録集編集委員会

千葉県成田市三里塚御料牧場一―二

（成田空港地域共生委員会事務局内）

電話 ○四七六一―三三―二〇三五

郵便番号 二八二

印刷 奥村印刷株式会社

※二冊組分売不可